

【研究テーマ】 子どもと共につくる教育・保育とは
 グループテーマ 『一緒に「やりたい」を見つける～安心できる環境作り～』

事例 「童心のつどい(発表会)に向けて」 1月21日(水)【3歳児】

— 子どもの心が動いた瞬間
 - - - - - ポイントとなる保育者・教師の働き掛け
 = = = = = 子どもの行動変容

(12月下旬)

- ・今年一年楽しんできたことを子どもたちと振り返り、表現遊びとして楽しむ
 童心のつどいに向けて、子どもたちとどのような遊びの世界を楽しむか話し合いを行った。
- ・子どもたちからは「お野菜育てたことが楽しかった!」「くわちん(クワガタ)のお世話したことが楽しかった!」「みっぱちゅう(アゲハの幼虫)がちょうちょになれてよかった!」など、様々な意見が飛び出した。
- ・担任は、理事長や園長、主幹などとともに『子どもたちの呟き』から表現遊びの準備を行い、今年の子どもたちだからこそその世界、表現が楽しめるように準備を行った。

1月21日(水)

○A児は集団の前で発表したり表現したりすることが苦手で、注目されると不安や緊張が高まり動けなくなってしまう姿が見られていた。運動会でも同様に緊張からプログラムに参加できない姿が見られていた。これは、そんなA児が童心のつどいの表現遊びを楽しもうと、3歳児クラスの子どもたちとホールに上がった時の出来事である。

3グループ構成で表現遊びを楽しむため、舞台裏に並んで待機する3歳児クラスの子どもたち。その中にA児の姿はなかった。ホールに戻って見渡すと、カーテンに隠れているA児の姿があった。初め、保育者はみんなが並んでいるところから「待ってるよ〜!」と言葉と視線を送って待っていたが、A児の姿は変わらなかったため以下の関わりを行った。

保育者:「Aどうしたの〜?一緒にやろうよ〜!」
 A児:「……………」カーテンに隠れたまま動かないA児。
 保育者:「そうだ!抱っこでいく?おてて繋いでいこっか?」
 A児:「……………」無言のまま保育者から離れてゆくA児。



そこへ、A児がいないことに気づいたC児がやってきた。
 C児:「Aどうしはったん〜?嫌なん〜?」
 保育者:「うーん、ちょっとドキドキしちゃうみたいなの。C Aと一緒に行ってあげてくれない?」
 C児:「いいよ〜!A一緒に行こ〜!」

A児:「……………」無言のままのA児。しかし、少し表情に笑顔が見られた。
 その時、「さあはじまるよ〜!」と保育者の声が聞こえた。



C児:「なんか嫌みたい〜」準備のため列の方にかけてゆくC児。
保育者は、B児に声を掛けることにした。
 B児は普段からA児と仲が良く、一緒に遊ぶことも多い子どもである。
 保育者:「B Aがちょっとドキドキしちゃうんだって。Aと一緒に行ってあげてくれない?」
 B児:「……………」無言でうなずき、A児の所に向かう。
 お互いを認識しつつも、なぜか距離が縮まらない二人の姿がみられた。
 保育者:「A!! Bがきてくれたよ〜!」
 保育者がA児をB児の所まで連れてゆくと、距離が縮まったことで安心したのか、A児がさっきまでの姿はなん

だったのかと思うほど、「さあいくよ!」と言わんばかりにB児の腕を引いて列に向かっていった。



その後 A 児は B 児とともに舞台上に飛び出し、ニコニコと笑顔を見せながら表現を楽しんでいた。

しかし、最後の歌を歌う場面では再び不安感が戻ったのか A 児は保育者に抱かれながら参加するのだった。



〈 考察 〉

- ・子どもは「やってみたい」という気持ちと、「恥ずかしい」「失敗したらどうしよう」という気持ちの間で揺れ動いている。その揺れを未熟さとして捉えるのではなく、育ちの途中として受け止め、保育者が子どもを信じて待つことで、子どもは自分で乗り越える経験ができる。その余白のある関わりが、ありのままの姿を引き出していると考ええる。
- ・保育者は安心できる存在であると同時に、人と人、場と場をつなぐ役割を担っている。子ども同士や環境との関係を丁寧につなぐことで、子どもが「ここにいていい」と感じられる安心感が生まれる。個々への対応だけでなく、関係全体を整えることが、安心できる環境づくりにつながっていると感じる。
- ・「やらないといけない」「やったほうがかっこいい」といった保育者の主観を押し付ける関わりでは、子どもの心は閉じてしまう。「一緒にしよう」という誘いかけと、評価しない姿勢があったからこそ、不安や恥ずかしさを抱えながらも子どもは場に向かうことができたのだと考える。
- ・発表会は、できるようになった姿やかっこよさを見せる場ではなく、「楽しい」「ワクワクする」時間であることが大切である。子どもの眩みや思いを起点に、一体となって遊びを広げていく中にこそ、保育者の専門性と「一緒にやりたいを見つける」実践の意味があると考ええる。
- ・子どもの主体性を支えるためには、保育者自身の主体性も問われる。迷いや揺れを抱えながらも、目の前の子どもと向き合い続ける姿勢そのものが、子どもにとっての安心につながる。正解を示すことよりも、共に考え続ける存在であることが重要だと感じる。
- ・安心できる環境とは、整えられた物理的環境だけでなく、失敗しても大丈夫だと思える関係性が積み重なった場である。日々の小さなやりとりや経験の蓄積が、子どもの「やってみよう」を支えている。その積み重ねこそが育ちの土台になっていると考ええる。